

栗原健成編『山梨半造の年譜』



本書は、平塚市で郷土の歴史を研究している栗原健成氏が編集し、偕行社に寄贈して頂いたものです。

山梨半造は、大正時代に二度にわたって行われた「山梨軍縮」で有名ですが、その人物像はあまり知られていません。本書の副題には、「神奈川県出身で唯一の陸軍大臣・陸軍大将」であったと書かれています。それ以上のこととなると、資料も乏しいのが実情です。

しかし、本書は、山梨半造の誕生から死去（80歳）までの年譜を、注釈も入れて、あくまでも客観的に、詳細に記録しています。

注釈を見ると、父の安兵衛は相模国大住郡下島村の名主であり、半造は1864年に次男として生まれています。やがて陸士に入学、陸大では田中義一（陸軍大将、内閣総理大

臣）と同期であり、32歳で田村怡与造の長女と結婚されたことなどが記されています。

その年譜を追うだけで、山梨半造の経歴や人脈のみならず、陸軍史の主要な流れが浮かび上がってきます。年譜の重要性を教えてください。貴重な一冊で、戦史を研究されている方にも参考になる図書だと思います。

柳原晃一郎他『境界 BORDER vol.1 大東亜戦争の記憶』



本書は、大東亜戦争の終戦前後、壮絶な体験をされた8名の手記を収めたものです。

手記を書かれた一人である柳原晃一郎氏が偕行社を訪れ、寄贈して頂きました。

『境界』というタイトルは、手記を寄せた8名の体験に共通する、国家間の境界、生と死を分けた境界、戦前・戦中・戦後という時代の境界という三つに由来しています。シベリアでの過酷な抑留から生還

した牛窪剛氏、葛根廟事件の数少ない生き残りの一人大島満吉氏、カザフスタンでの重労働を耐え抜いた呉正男氏、機雷に触れて沈没した徴用船の航海士だった柴垣直行氏、満蒙

開拓団の少年時代、ソ連に拘束され、その後八路军として徴用された経験を持つ高橋章氏、コムソモリスクでの飢餓寸前の凄惨な抑留生活に耐え抜いた西倉勝氏、東京空襲から奇跡的に生き延びた日比野靖氏、少年飛行兵としての経験を通して戦後日本

について考えてきた柳原晃一郎氏。8名の方は、陸幼、陸士の出身者ではありませんが、軍人、民間人、市民など、それぞれの立場で生死の境で貴重な体験をされています。このような体験談を、後世に伝えることも偕行社会員の役割の一つであると強く感じた一冊です。

渡邊陽子著・火箱芳文監修『神は賽子を振らない』第32代陸上幕僚長火箱芳文の半生』



とにかく時間を忘れて夢中になっ てしまいう一冊です。

本書はベテランの防衛ライター渡邊陽子氏の最新作で、火箱元陸幕長の幼少期から退官されるまでの半生を数十時間にわたってインタビューし、月刊誌に連載したものを、今春「株」アルゴノートから出版したものです。

火箱元陸幕長は、新編間もない沖縄第1混成群への隊付を皮切りに指揮官や幕僚としてさまざまな職務に従事されました。それぞれの職務で壁にぶつかりながらも、創意を尽くして任務遂行に邁進する姿勢は、爽快であり、清々しさを感じます。

本書には、防衛、統率、教育訓練等、幹部自衛官にとって必須の事項に関する火箱氏の哲学、いわば「火箱イズム」とも言うべきものが至るところにちりばめられています。特に、現職の自衛官には自衛官人生の力強い指針となることと思います。

以上の三冊は、偕行社編集委員会の書庫に保存しております。ご興味のある方は編集委員会にお申し出ください。